慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「サント・ブーヴ批判」から「失なわれた時を求めて」
Sub Title	Du Contre Sainte-Beuve à la Recherche
Author	稲葉, 竹俊(Inaba, Taketoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1985
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.47, (1985. 12) ,p.80- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00470001-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「サント・ブーヴ批判」から「失なわれた時を求めて」

稲葉　竹俊

(I)　1908年秋から翌年の春まで

本稿で議論の対象となるのは，Marcel Proust の小説，*A la recherche du temps perdus* の執筆開始の前段階のエクリチュールである。

現在，多くの研究者は，未完成小説，*Jean Santeuil* 執筆放棄の後，Ruskin の翻訳や時評家としての仕事に向けられていた Proust の活動が，再び小説創作へ回帰していく時期として，1908年初頭のあたりを想定している[1)]。だが，この〈小説〉の執筆の試みも，その年の秋には放擲され，Proust は Sainte-Beuve の批評方法に対する批判を中心に据えた批評文の執筆に着手する事になる。ここで，本稿が取り扱うのは，まさにこの Sainte-Beuve 批判の1908年秋の執筆の開始から中断・放棄，そして将来 *A la recherche du temps perdu* というタイトルを持つことになる〈小説〉の執筆へという曲折した経路をたどった，この時期の Proust の執筆活動が，〈小説作製の歴史〉の上ではたした意義である。

この1908年秋以降の Proust 執筆活動は，すでに Quémar, Brun の諸論文[2)]によってその全貌が，かなり仔細に明らかにされている。これらの研究者の仮説に従えば，1908年11月頃，Proust は，前述した通り小説執筆を断念し，Sainte-Beuve 批判執筆を思い立ち *Carnet 1*[3)] にそのためのノートを書きつけ始めるに到った。そして，それと並行し，現在 *Proust 45*[4)] と呼ばれている草稿の執筆を開始したが，この Sainte-Beuve 批判の計画は，その年の末には，〈récit〉形式における批評文として構想

される事になる。この〈récit〉形式を想定して書かれた Sainte-Beuve 批判は，現在 Bibliothèque nationale にある 62 冊の *Cahiers* (草稿ノート) 中で最も執筆時期の早いと考えられる *Cahiers Sainte-Beuve*[5] 中，*Cahier 3, 2, 5, 1* の順で書かれたと思われる 4 冊の *Cahiers* にその草稿を見出す事ができる。そしてこの 4 冊以降に書かれた 6 冊の *Cahiers*，つまり *Cahiers 4, 31, 36, 7, 6, 51* (endroit) は，すでに〈小説〉のための草稿ノートであり，その執筆時期は，1909 年 3 月以降と推定される。これらの事実関係の具体的な議論は Quémar, Brun の論文に任せるとして，これらの研究が我々の関心を引く重要な点は，この時期の Proust の執筆活動が，三つの大きな段階を経ていった事である。つまり，Sainte-Beuve 批判，〈récit〉形式の Sainte-Beuve 批判，そして〈小説〉である。以後，Quémar 等の命名を踏襲し，Sainte-Beuve 批判のために書かれた草稿を *Contre Sainte-Beuve « Essai »*，〈récit〉形式の Sainte-Beuve 批判を *Contre Sainte-Beuve « Récit »* と呼び，そのそれぞれを *C. S. B. E*, *C. S. B. R* という略号で指示する事にする。

(II) *C. S. B. E* の意図

1908 年 11 月以降に着手された *C. S. B. E* の目論見は，今世紀初頭にはなお偉大な批評家であった Sainte-Beuve の文学理念を批判しつつ，自己の文学・芸術論を定位する事によって，小説執筆という野心の坐礁のいわば〈埋め合わせ〉をする事であり，また当時の Proust の健康の著しい悪化の状況を考慮すれば，畢竟〈文学的遺言〉とも言うべきものであったと言えよう。Proust にとって，この美学的理念は，*Jean Santeuil* 執筆当時から常に，彼の創作活動がそこをめぐって成されるような，一つの中心軸ともいうべきものであった。度重なった〈小説〉執筆の失敗も，この Proust の écriture の理念的局面の〈小説〉形式に於ける具現化の困難さによるものだった事は，Blanchot[6] 等の批評家達の明らかにした所である。

Proust の美学理論を本論で詳述する事はできないが，この理論は以下

の点に要約し得ると考えられる。

つまり，第一に，文学作品は作家の内的世界の反映であり，その社会的人格の関与する所ではなく，よって伝記的調査や第三者の証言から作品を把えようとする Sainte-Beuve に代表される批評方法は否定されるべきであるという反実証主義的文学観。第二に，この作家の内的世界は，知性によって分節化された世界認識にその根拠をもつものではなく，感覚的世界に基づくものであるとする反知性主義。第三に，このような感覚的世界は，無意識的記憶・夢・印象がさし示すシーニュ (signe) を芸術のシーニュへと昇華させる事を通じて芸術作品の中に具現化され得るとする芸術観。

C. S. B. E の草稿は，Sainte-Beuve の方法への批判や，この批評家の誤読の対象となった作家 (Balzac, Baudelaire 等) の読解を通じて以上のような内容をもつ芸術論を例示しようとした Proust の意図を，断片にとどまりつつも，はっきりと示していると思われる[7]。しかし，この *C. S. B. E* の企図は，1908 年の末には *C. S. B. R* の企図と競合し，やがては放棄されるに至った事は前述した通りである。

1908 年 12 月中旬，Proust は Noaille 夫人宛に次のような手紙を送っている。

> Est-ce que vous voudriez me permettre sans préambules, de vous demander un conseil. Je voudrais, quoique bien malade écrire une étude sur Sainte-Beuve. La chose s'est bâtie dans mon esprit de deux façons différentes entre lesquelles je dois choisir. Or je suis sans volonté et sans clairvoyance. La première est l'essai classique, l'Essai de Taine en mille fois moins bien (sauf le contenu qui est je crois nouveau). La deuxième commence par un récit du matin, du réveil, Maman vient me voir près de mon lit, je lui dis que j'ai l'idée d'une étude sur Sainte-Beuve, je la lui soumets et la lui développe.[8]

本書簡中，« l'essai classique » と呼ばれているのが，*C. S. B. E* の企図であり，« un récit du matin » と言及のあるものが，*C. S. B. R* の企

図であるのは言うまでもない。むしろ，ここで注目すべきは，この両者がそのいずれか一方の選択を困難ならしめるような形で Proust に把握されており，この両者が短かい時間に継起して着想されつつ，並行的関係の中で共存していたという事態である。

以下，Proust のペンが産み落した〈シャム双生児〉とも言うべきこの二つの〈avant-texte〉の間テクスト的類縁性という観点から，*C. S. B. R* を考察する事にする。

(III) *C. S. B. R* の物語装置

C. S. B. R の執筆はあくまで草稿の段階にとどまるものであり，決して一貫した〈récit〉が，先程言及した4冊の *Cahiers*——つまり *Cahiers 3, 2, 5, 1*——に定着される事はなかった。数度に渡って書き改められた断片の集合が，これら Cahiers の内容である。従って，この〈récit〉が如何なる構造を有していたかは，あくまで諸断片の照合から類推せざるを得ない。而も執筆のプロセス自体は，〈récit〉の構造にゆらぎを生じせしめ，加筆・削除の反復の中で逆に草稿の全体の統一性は，しだいに見失なわれていった本ケースのような場合，着想の起源に一個の一貫した執筆プランを措定する事自体，このエクリチュールの運動の重要な局面を一まずは不問に付す事によってのみ可能な操作ではある。しかし，この運動の局面についての考察を行なうためにも，その準備段階としてこの〈récit〉の元型を明らかにする必要がある。

まず，この〈récit〉の三つのシークエンスからなる基本的物語シェーマを示しておこう。

C. S. B. R は，Kawanago[9] の指摘したように，次のような «triptyque de l'article» とも呼ぶべき三つの主要な場合の連鎖から成立していると考えられる。

（1） 主人公 (Je) は，朝まで眠らずに起きている。

〈夜明け〉

（2） 母が主人公の寝室に入ってきて，*le Figaro* を彼に渡す：*le Figaro*

に主人公の記事が掲載されている。

（3） 母との次に書くべき Sainte-Beuve 批判の記事をめぐる会話。

さらに，この (1)～(3) の各場面に，夢や覚醒時の身体的記憶，視覚や聴覚映像による無意識的記憶や観念連合が配置される。つまり，

（1） 夢や覚醒時の身体的記憶，ベッドの中から聞く街頭のざわめきによる観念連合。

（2） 朝焼けの空の映像によって蘇った Jula への旅行の思い出。

（3） 風見の映像によって喚起される Venise 旅行の記憶，バルコンの上を戯れる日の光がもたらす観念連合及び幼児期の恋愛体験の蘇生。

以上のように *C. S. B. R* は，夜明け前から早朝までの時間経過の中で，主人公 (Je) に継起して起こる諸体験を提示し，いわば結論部ともいうべき部分に，母との会話形式による Sainte-Beuve 批判——それは，すでに *C. S. B. E* で〈essai〉の形式で定着されていた——を布置するという構造をもったのであった。

この *C. S. B. R* と *C. S. B. E* とが Proust にとって等価なものとして把握されていた事は，先程述べた通りであるが，それは如何なる事情に基づくものだろうか。*C. S. B. R* の (3) における会話部分が，*C. S. B. E* の内容を会話という形式で再現するものである事は容易に予想がつく。しかし，この会話に先立つ記憶現象や観念連合の具体的描写の存在をどう説明すべきなのだろう。Proust にとって，それは〈会話〉を整合性をもった形で導く一つの物語的戦略にとどまるものだろうか。

Kawanago は *C. S. B. R* の分析を通じて，会話に先立つ具体的描写を (1) から (3) への〈récit〉の進行を遅らせる異質な要素として，〈会話〉に先行する具体的描写を «segments-parenthèse» というカテゴリーに分類した[10]。そしてこれらの異質の要素の〈récit〉の内部に於ける存在理由を〈récit〉に unité d'action を導入するという機能に限定している。

しかし，この Kawanago の分析は〈récit〉を組織するにあたっての Proust の目論見を考慮に入れず，きわだった機能主義的陥穽に落ち入っているように思われる。つまり，この〈segments-parenthèse〉と呼ばれ

る部分が，Proust の美学理論の重要な一端を担う記憶現象や夢，さらには観念連合といった感覚的世界を具体的に提示しているという事態自身には何ら言及がなされていないのである。むしろ，これらの具体的描写部分は，会話部分と緊密に結び合いつつ，一つの〈récit〉を形成するべきものとして，この企図の当初から着想されていたと考えるべきではなかろうか。

Suleiman は，その le roman à thèse に関する研究の中で[11]，〈parobole (寓話)〉がその一義的な意味(教訓やイデオロギー等)を読者に伝達するために必要な条件として，次のようなものをあげている。

1) 物語で起こったでき事を寓話として正しく解釈するよう読者に指針を与える言葉 (énoncé interprétatif) の存在。

2) 一義的なメッセージ伝達に必要十分な情報の冗長性 (redondance) が，〈récit〉の様々なレベルに仕組まれている事。例えば，物語レベル内部での冗長性や物語外 (extradiégétique) と物語内 (intradiégétique) での 1) に相当する冗長性などが考えられる。

以上のようなモデルに従って，先程その概観を示した *C. S. B. R* を再び取りあげた場合，この〈récit〉がきわめて〈parabole〉に近い構造を有している事が明らかになる。つまり，1) の条件をみたすべく機能しているのは，勿論〈会話部分〉であり，記憶現象や観念連合の再三・再四に渡る描写は，物語内における几長性を産み出していると言えるだろう。読者の〈会話〉に先立つ具体的描写の一般的な意味への還元は，この冗長性によって，より容易なものとなる。そして，読者へ伝達すべき一般的意味とは言うまでもなく Proust の芸術理論である。このように，*C. S. B. R* の試みは，読者の読みを一義的な形で構造的にプログラム化した〈parabolique〉な〈récit〉の構築であったと考える事ができる。また，*C. S. B. E* と *C. S. B. R* の等価性は，*C. S. B. R* を〈récit parabolique〉として把握する時，より納得の行くものとなる。

C. S. B. R の放棄は，この一義的な意味を生産するはずだった〈物語装置〉の瓦解の過程の中で惹起される事になるのだが，その問題は後述する

事とし，やがて未完の長編小説執筆の中へ伝説的ともいえる異常な没入をしていった Proust にとって，芸術理論はどのような位置を小説の中で占める事になったかをおさえておこう。

(IV) 理念小説としての *Version Valette*

A la recherche de temps perdu というタイトルの下に出版される小説の執筆が始まった時期が，およそ1909年3月頃である事は前述した。その後，小説の作製は順調に進行し，その年の8月には，この小説は完成に近づきつつあったと思われる。Proust がその小説の発表を請け負ってくれる出版社を探し始めたのも，丁度この時期である。

1909年夏，Proust は *Mercure de France* の編集長 Valette に次のような書簡をしたためている。

> Je termine un livre qui malgré son titre provisoire : *Contre Sainte-Beuve, Souvenirs d'une Matinée* est un véritable roman et un roman extrêmement impudique en certaines parties. Un des personnages principaux est un homosexuel. Et ceci je compte que, tout à fait à la lettre, vous m'en garderez le secret. Si la chose est sue avant le livre paru, nombre d'amis dévoués et craintifs me demanderaient d'y renoncer. De plus je m'imagine qu'il y a dans tout cela des choses neuves (pardonnez-moi) et je ne voudrais pas être dépouillé par d'autres. Le nom de Sainte-Beuve ne vient pas par hasard. Le livre finit bien par une conversation sur Sainte-Beuve et sur l'esthétique (si vous voulez, comme *Sylvie* finit par une étude sur les Chansons populaires) et quand on aura finit le livre, on verra (je le voudrais) que tout le roman n'est que la mise en oeuvre des principes d'art émis dans cette dernière partie, sorte de préface si vous voulez mise à la fin.[12)]

この貴重な書簡は，1909年夏の時点における〈小説〉が *C.S.B.R* の末尾と同様，Sainte-Beuve 批判や芸術論に関する会話を，いわば，結論部として尚，変らずに保持している事を教えてくれる。また，小説全体は

芸術理論の“la mise en oeuvre”以外のものではないという規定がされてもいる。〈parabole〉とは異なった形式をもつ〈小説〉に於いても，依然として，Proust の最終的な意図は自己の芸術理論の表明にある。〈小説〉の中で〈理論〉がどのような位置づけをされるようになるかについては，後で述べる事になるだろう。

Proust の強い願いも空しく，*la Recherche* 第一稿とも言うべき *version Valette* は，Valette の出版拒否の憂目に会い，結局日の目を見る事はない。その後，Proust は，母による *François le Champi* の読書光景の再生，マドレーヌ体験，le bruit de la fourchette contre l'assiette によるレミニセンスといった小説内に散在している無意識的過去のエピソードに，この記憶現象の芸術理論による説明の部分をつけ加える。〈会話〉部分のみならず，物語内部の各所への理論の分散化を図るこの操作は，1909 年末から 1910 年にかけて行なわれたと思われる[13]。しかし，*Matinée chez la Princesse de Guermantes* での文学的啓示を中心とする最終章 *L'Adoration perpétuelle* が，*Cahier 57, 58* に執筆され，〈会話部分〉に代わって «histoire d'apprentissage»[14] の結論部として配置されるようになると，分散した〈理論的説明〉は，この小説の末尾へと再び集められる。*version Valette* の再加工の段階でも，作家の主要な関心の一つは，〈理論〉の処置である。

*　　*　　*

以上，(II) から (IV) に於いて，*C. S. B. E*, *C. S. B. R*, さらに〈小説〉という，再三に渡る企画の変更の中で，一貫して維持され貫徹された〈理念〉の支配を確認し，それによって，我々はこれら三つの時点を互いに結びつける連続的な糸を手に入れる事ができたかのようである。この糸によって，この三つのテキストは相互に肯定し合い，Proust のエクリチュールは同語反復的な運動を帯びたものとして浮かび上がって来る。

しかし，このような視座によって把握されたエクリチュールは，“une étude sur Sainte-Beuve”というコンテクストから〈小説〉のコンテクストへの移行の意義を十分に説明していないのではなかろうか。以後，こ

の二つのコンテクストの連続性よりは非連続性や断絶に注目する事にする。

(V) *C. S. B. R* の解体

> Ce qui a le plus de chance de paraître un jour est Sainte-Beuve (pas le second pastiche, mais l'étude) parce que cette malle pleine au milieu de mon esprit me gêne et qu'il faudrait se décider ou à partir ou à la défaire. Mais j'ai déjà beacoup oublié et qoique je devrais lire du tout, je lis beaucoup et dans un tout autre ordre. Néamoins si je suis encore vivant cet automne, il y a des chances pour que *Sainte-Beuve* ait paru et je crois que cela vous plaira.[15]

Proust が Georges Lauris に宛てた書簡からの引用である。この書簡が書かれた1909年3月初旬には，すでに Sainte-Beuve 批判執筆の進行が難渋をきわめていた事を窺い知ることができる。

以下，*C. S. B. R* の草稿，つまり *Cahier 3, 2, 5, 1* の4冊の *Cahiers* の分析を通じて，上の書簡でも語られている *C. S. B. R* 執筆の困難さ，そしてその崩解のプロセスに光をあてる事にしよう。これら4冊の *Cahiers* の後に書かれたと推定される6冊の *Cahiers* は，すでに〈小説〉をそのコンテクストとして有する *Cahiers* であり，前述した *version Valette* へと練り上げられていく事になる〈小説〉の初めての草稿である。これらの草稿については，次に簡略な内容の概略を記すにとどめておく。

Cahier 4: *Combray* の最初の下書き，祖母との海岸地方での休暇 (Balbec 滞在の母体)。

Cahier 31: *Un amour de Swann* の下書き，Saint-Loup の原型，Jacques de Monturgis 等 Guermantes 家の人々の導入。

Cahier 36: Swann の死，la femme de chambre de Picpus との出会い。

Cahier 7: Combray に関する草稿の補足，M de Guercy (Charlus) を中心とした同性愛のテーマの導入。

Cahier 6, Cahier 51: *Cahier 7* の補足・延長。

このような要約によっても，*C.S.B.R* の枠組から開放された Proust のエクリチュールが，いかに広大な小説空間へと拡張運動を成し遂げていったかを理解するには，十分だろう。*C.S.B.R* から脱出した Proust の筆は，堰を切った奔流のように流れ出し，急転直下，〈小説〉の執筆へと集中していった。しかし，〈産みの苦しみ〉といった隠喩を用いて，*C.S.B.R* 執筆の困難さと〈小説〉の〈誕生〉との間に，一つの有機的な生成の歴史を安易に想定してはならない。むしろ，ここで問われなければならないのは，*C.S.B.R* の〈流産の苦しみ〉である。

(III) で示されたように，*C.S.B.R* は，〈parabolique〉な "récit du matin" として着想された草稿である。4 冊の *Cahiers* の分析にあたっては，このコンテクストを念頭においておく必要がある。このコンテクストから逸脱していく要素の草稿内に於ける増加が，やがて，なしくずし的に〈流産〉を引き起こしていったというのがこの小論の仮説である。この事態を考察する事にしよう。

前述したように，*C.S.B.R* は，三つのマクロ・シークエンスによって成立し，各シークエンスは，無意識的記憶や観念連合を具体的な場面の中で提示する企画だった。これらの場面は，草稿中で再三に渡る〈書き直し (ré-écriture)〉の対象となる。4 冊の Cahiers の中での，この〈書き直し〉のプロセスは，次のページの図のように行なわれた。

以上のようなプロセスの中で，Proust のエクリチュールは，こう言ってよければ，情報のエントロピーを増大させるような〈雑音〉を増幅させていく事になる。換言すれば，〈récit parabolique〉を組織化し，支配すべき〈理念〉のレベルに対して非関与的な要素の増大によって〈parabole〉は，十分な機能性を喪失していった訳である。

このプロセスを，具体的な例を挙げながら，逐一見ていけば膨大なスペースを必要とするだろう。ここでは，表の 1. *Souvenirs du dormeur éveillé* の草稿にのみ議論を絞って例証する事にする。

Cahier / Thème	*Cahier 3*	*Cahier 2*	*Cahier 5*	*Cahier 1*
1. Souvenirs du dormeur éveillé (シークエンス 1)	(1 R° à 18 R°)	→	(114 V° à 106 V°) →	(71 V° à 61 V° et 67 R° à 62 R°, 61 V° à 58 V° et 61 R° à 59 R° et 58 V° à 57 V°)
2. Résurrection du ciel rouge (シークエンス 2)	(27 R° à 28 V°) →	(7 R° à 8 R et 29 V° à 26 V°)		
3. Résurrection de Venise (シークエンス 3)	(43 R° à 41 V°) ↓ (38 V° à 31 V°)			
4. Le rayon du soleil sur le balcon (シークエンス 3)	(39 R° à 40 V°)	→	→	(3 R° à 6 R°, 4 V°, 5 V°, 6 R°, 7 R° et 6 V° et 7 R° à 10 R°)

この場面は，〈récit du matin〉の冒頭を形成するはずであった。深夜，目を覚ました dormeur の時間的・空間的な認識の喪失を救済するかのように，脇腹や腕や足が，かつて自分が眠った部屋の幾つかを回想するという身体的記憶のテーマが *Cahier 3* で導入される。この *Cahier 3* の段階では，この記憶は一般的な現象として提示される事によって〈理念〉的コンテクストに背離する傾向は最小限にとどまる。

2r° Parfois aussi le jour en paraissant au-dessus des rideaux ne vient pas seulement apprendre à celui qui vient de s'éveiller où est la fenêtre, où est la cheminée ; mais aussi dans laquelle de toutes les maisons qu'il a habitées, dans lequel [des] pays qu'il a visités, dans laquelle des années de sa vie il se trouve. Car il a perdu en dormant le plan des lieux où il se trouvait, et réveillé dans l'obscurité il est incapable de le reconstruire, de situer sa vie qui erre incertaine à la recherche d'un gîte et d'un temps, et tous les murs

entre lesquels il a dormi se livrent dans l'obscurité un assaut furieux pour donner une forme au lieu inconnu où il s'est éveillé. A plus d'un de ses lieux, qui auraient dû lui rester sacrés si notre pensée et notre cœur n'avaient si peu de force il n'a jamais re-songé depuis. Mais voici que son côté s'en souvient et son cou, et ses jambes allongées qui imaginent à leur gauche le petit cabinet de débarras de la maison détruite depuis longtemps et les jouets entassés, et la vieille *nourrice* servante, et bientôt l'heure du réveil pour aller travailler sous la lampe avant l'heure du collège, et
3r° devant lui la chambre où ses parents dorment côte à côte. Mais dans l'obscurité la chambre change encore de forme et s'entoure d'une autre demeure située dans un autre pays. Et tour à tour le jour se lève sur la cour de la caserne, et il faudra vite aller boire le café brûlant à la cantine avant de partir en *campagne* marche, dans le jour à peine levé *gaiement avec la musique qui va réveiller la ville endormie, et bientôt sonner dans la campagne*, musique en tête dans la ville endormie ; puis notre main croit s'approcher dans l'obscurité du grand bahut d'une chambre de château ; ⟨ c'est donc les [illisible] ; mais non ce n'est pas un lit sur lequel nous sommes, cela doit être la chaise longue où on s'endort après dîner dans la villa au bord de la mer, mais il fait nuit, tout le monde est-il allé se coucher m'oubliant ici ; non j'ai accepté à dîner ⟩ et nous flottons incertains entre les lieux et les années qui tournent autour de nos yeux étourdis qui ne peuvent s'ouvrir.

3R° Ses yeux qu'il ne peut tenir ouverts n'imaginent aucune vie dans
4R° l'obscurité, mais son corps à qui sa fatigue donne comme une forme, incertain s'il s'éveille dans *un* son lit ou sur le fauteuil où tout enfant il s'endormait avant de se déshabiller, imagine à côté de lui le petit cabinet de débarras où gisent pêle-mêle tous ses jouets, et où ses *affaires* vêtements étaient si difficiles à décrocher sous le rideau de [sic], et en face de lui la chambre où ses parents dorment côte à côte.

Mais *dejà son corps s'est créé un autre milieu ou* le milieu où son

corps essaye de se situer a déjà changé de forme et c'est tour à tour devant lui la cour de la caserne où bientôt le jour va paraître et où il va falloir descendre vite boire à la cantine le café au lait bouillant avant de partir en marche, déjà les rangs se forment, musique en tête, qui sonnera dès qu'on sera sorti dans [ou de] la ville endormie ; mais non c'est le bahut de la *belle* chambre du Château de Réveillon qui est près de moi, je me suis endormi avant de descendre dîner, on doit être à table, mais les murs se rétrécissent, ma chambre fait un quart de cercle, ce sont d'autres chambres à côté de moi dans l'hôtel d'*Anvers* Ostende, mais on [n']entend pas le bruit de la mer. Bah voilà ma chambre qui descend au rez-de-chaussée, n'a plus de tapis, donne sur des pommiers en Bretagne, je suis souffrant et maman dort dans la même chambre au fond, pour m'en assurer je veux tâter s'il n'y a pas de tapis et appeler maman, mais ma voix ne peut pas sortir de la
5r° bouche et mon bras ne remue pas et pendant un instant encore les formes et les temps vont tourner autour de mon corps étourdi et rompu présentant un sentiment de l'avenir immédiat qui change du devoir qu'il faudra emporter tout prêt en partant pour le collège en ayant ma leçon à réviser avant le roulement de tambour, et la peur de m'être endormi dans le salon de jeu du cercle de Trouville et d'avoir été oublié quand [on] aura fermé et éteint les lumières.

(下線は引用者による。イタリックは削除，〈〉は加筆，[ ] は筆写を行なった者の介入を表わす。)[17]

上の引用は，身体的記憶による寝室の回想場面のために書かれた草稿の一部分である。3R°～5R° の草稿は，2R°～3R° の〈書き直し〉部分を含んでいる。2R°～3R° のテキストでは，dormeur éveillé が，"celui"，'nous" といった主語で担われる事によって，身体的記憶現象は一般的な性格を与えられる。これに対し，3R°～5R° のテキストでは，主語として "Je" が支配的になるにつれ，回想の対象となる寝室も "la chambre du Château de Réveillon" "Trouville" 等，具体的な個有名詞によって限定化されるようになる。これらの地名の背後には，Milly の指摘したよう

に，*Jean Santeuil* や〈自伝的源泉〉が控えているのだが，あくまでもそれは，テキストの表層に氾濫する事は抑止されている事によって，身体的記憶現象自身に焦点を合わせるべきこのテキストの秩序を乱す事はない。回想現象自身よりも，むしろ回想対象の具体的記述へとエクリチュールが傾斜して行く時，初めて理念的射程にはおさまらないテキストの雑音が生ずる事になる。*Cahier 3*, 1R° à 18R° の草稿内では，まだこのような情況は生じていない。

Proust は，*Cahier 3* で描かれた身体による寝室の回想場面を *Cahier 1* で，再度取り上げる。この〈書き直し〉によって，“私”の回想は，寝室を起点に〈外〉へと拡がって行く

例えば，*Cahier 3* で素描された Château de Réveillon の寝室の回想の記述は，*Cahier 1* の草稿では，〈寝室〉をさまよい出て，“私”が幼年時代をすごしたあたりの田舎町や田園を城の女主人に付き添われつつ散歩する場面へと引きづられていく (*Cahier 1*, 61R°, 60R°, 59R°, 58V°)。この場面が，やがて書かれる小説の最終章の重要なエピソード，つまり Mme de St-Loup との Tansonville での散歩の母体となる事は言うまでもない。だが，*C. S. B. R* のコンテクスト内での，回想対象の過度の個別化は〈理念〉への情報の集中化を妨げる分散的要素となる。

このようなエクリチュールの運動例として，今度は，*Cahier 5* で導入された夢の回想場面の草稿をあげてみよう。

夢は幼年時代の〈traumatisme〉を呼び起こす。夢の中で，巻毛を司祭や叔父に引張られそうになる時の恐怖や自慰による快楽が忘却の底から蘇る。*Cahier 5* では，自慰による快楽の追想は，次のような，きわめて暗示的なものにとどまる。

[109V°]
D'autres sensations si basses qu'un écrivain ne serait pas excusable d'en parler si
〈C'étaient aussi〉 d'autres impressions à peine *plus* moins anciennes, 〈mais〉 si basses qu'un écrivain serait inexcusable de les

dépeindre si l'impossibilité où on est de les ressentir une fois passée la première adolescence, ne *fais*[ait] leur *en laissait le parfum*, donnait quand elles *passaient* se montraient dans mes rêves ce charme d'être détachées de tout lien avec la *réalité* terre, de s'y épanouir comme des fleurs d'eau, et donner en somme le parjum de cet âge *aussi bien que d*[e] comme tout ce qui a disparu avec lui, *q*[ue] poétique ou non, comme une 〈chaude〉 journée peut être évoquée aussi bien par le bourdonnement des mouches dans la chambre, que par le parfum du lilas dans le parc. La Rochefoucauld a dit qu'on n'aime qu'une fois dans sa vie. 《Les autres amours sont moins involontaires.》 J'en dirai autant de ce plaisir qu'à l'âge où l'on ne connait pas encore l'amour on cherche seulement auprès de soi-même. On ne le connaît guère qu'une fois. Bien vite [109r]° on *y associe* ne se contente pas d'y associer vaguement l'idée d'une femme, on s'imagine que c'est elle qui vous le donne, on *est dans ses* veut croire [qu'on] n'est pas seul, on est dans ses bras, *et* 〈on ne cherche pas ce plaisir solitaire pour lui-même〉 on ne se donne en somme qu'une occasion de plus d'être avec elle, comme dans les amours dont parle La Rochefoucauld on n'aime *plus per*[sonne] / *que ce qui provoque à* la femme 〈qu'on aime〉 n'est plus qu'une manière de provoquer en nous le trouble de l'amour qui la 1ere fois fut involontaire, et si délicieux que nous voulons le multiplier en le goutant artificiellement. Aussi qu'est-ce qui caractérise mieux la quinzième année, que

(下線は引用者による。)[18]

この引用部分は，夢による回想を描く場面のいわば〈結論部〉を形づくるものとして書かれている。従って，“on”の頻繁な使用にも典型的に示されているように，一般化への傾向が特に顕著である。自慰の快楽への言及も La Rochefoucauld の格言の傍に，対を成すように暗示的になされているにすぎない。夢によって顕在化し，自我の〈検閲〉をかいくぐって出現する感覚的世界を肯定的に語る事がこの草稿のテーマである。

しかし，すでに引用の最後に *Cahier 1* での逸脱を予告するかのような，

かすかな徴がまぎれこんでいる。このパッセージは，“Aussi qu'est-ce qui caractérise mieux la quinzième année, que” という文章の中途で，突然中断されているが，*Cahier 1* の〈書き直し〉は，この中断箇所から大きな脱線を示す。上に引用した *Cahier 5* の一節と細部の小さな変更を除けば，ほぼ同一の一節の後，Proust の筆は Combray の家の小部屋での初めての自慰体験の記述へと，唐突に移行していく (*Cahier 1*, 68R°)。この移行の冒頭を次に引用する。

> La Rochefoucauld a dit que nos premières amours seules sont involontaires. Il en est ainsi aussi de ces plaisirs solitaires qui plus tard ne nous servent qu'à tromper l'absence d'une femme, à nous figurer qu'elle est avec elle. Mais à douze ans quand *on va s'enfermer la 1re foi*[s] j'allai m'enfermer pour la 1re fois dans le cabinet qui était en haut *du château et* 〈de notre maison à Combray〉 où des colliers de graines d'iris étaient suspendus, 〈ce que je venait chercher〉 c'etait un plaisir inconnu, *spécial* original, [67v°] qui n'était pas la substitution d'un autre.
>
> (下線は引用者による。)[19]

Cahier 5 では，その一歩手前で立ち留まる事によって抑止された〈逸脱〉は，“on” が削除され，“Je” に代わり，“château” が “notre maison de Combray” に置換される時，もはや避け難いものとなったかのようだ。この引用部分の後，〈souvenir-écran〉とも言うべき自慰の場面が描かれる (68R°, 67V°, 66V°, 67R°)。さらに，この場面の末尾で，部屋の外から漂ってくるリラの花の香が言及されると同時に，今度は，その香に誘い出されるように，Combray の小川に遊ぶ子供達や名も知れぬ釣人達といった，後に Vivonne 川を彩どる事になるであろう諸情景へと記述は移行していく (66V°, 65V°)。このような〈漸進的横滑り〉のプロセスによって，その起点となった夢の回想場面から遠くへだたった地点までエクリチュールは迷走していく。

以上，*Souvenirs du dormeur éveillé* の草稿中から二つの例を取って，*C. S. B. R* が本来構築すべきだった〈parabole〉の〈書き直し〉による解

体過程を示した。この (V) の最初に図示したように，〈書き直し〉は，各シークエンスに配置された回想場面のそれぞれについて行なわれている。従って，草稿全体へと目を移せば，上に観察したようなエクリチュールの迷走が，多発的かつ無秩序に各所で生じている光景が浮かび上って来るはずである。

無数の迷走線の錯綜と化した草稿に描かれたエクリチュールのプロセスは，記憶現象や観念連合の冗長性に基づいた〈例証〉的提示を妨害し，読者の〈récit〉の綜合的解釈を不可能にする体のものであったといえよう。そこでは，〈parabole〉としての *C. S. B. R* の企画の挫折は，避ける事ができない。中心化を図る理念的レベルと脱中心化していくエクリチュールの運動は，*C. S. B. R* では真向から互いを否定し合う関係の中に置かれている。では，Proust が〈小説〉執筆に着手した時，この二者の関係に如何なる変動が生じたのか。

(VI) 〈小説〉の執筆

Cahiers Sainte-Beuve 後半6冊の Cahiers がすでに〈小説〉を念頭に置いて書かれたものである事は，(V) ですでに述べた。また，Valette 宛の手紙の中で，やがて *Contre Sainte-Beuve*, *Souvehirs d'une Matinée* というタイトルで呼ばれるようになる小説が，その末尾に *C. S. B. R* と同様に，〈会話〉を配していた事も (IV) で触れた通りである。では，*C. S. B. R* と〈小説〉を決定的に区別しているのは，どのような点だろうか。

これに関する議論で常に問題にされてきたのは，〈小説〉の語りのシステム (système de la narration) の定立であり，それによって開かれた小説製作の可能性である[20]。しかし，この語りの問題に深く立ち入る事はせず，その定立によって〈小説〉の構造はいかなるものになったかを次のシェーマで，まず示しておこう。

(1) 主人公 (Je) は，朝まで眠らず起きている：かつて私が早寝をし

ていた頃の身体的記憶による寝室の再生。

→ Combray の物語セクション
→ Querqueville (Balbec) のセクション
→ Paris のセクション
→ Venise のセクション，etc.

（2） 夜明けを主人公 (Je) は迎える。

（3） Sainte-Beuve や芸術論に関する会話。

この〈小説〉の構造は，*C. S. B. R* ですでに定立されていた〈récit du matin〉のシークエンスを維持しつつ，(1) の回想部分に小説の中心部分を挿入して成立しているが，この挿入を可能にしたのは，早寝をしていた時代の私の身体的な記憶作用を主人公(不眠の私)の寝室から，小説の舞台への場面転換のための接続点として使用するという着想だった。こうして Combray, Querqueville, Paris, Venise を舞台とする主人公の過去のでき事がすべて語られると，主人公は朝を迎え，小説の末尾に母との理論的会話が置かれる。また，物語構造は，語り手の〈Je〉—主人公の〈Je〉=不眠の〈Je〉—早寝の〈Je〉という三重の〈Je〉によって成立する語りのシステムによって支えられる事になる。

以上のような新しいコンテクストに置かれた Proust のエクリチュールは，*C. S. B. R* の草稿での無秩序から脱し，一気呵成に〈小説〉を構成すべき各場面を描いていく事になる。この事態は，〈小説〉の物語セクションが，*C. S. B. R* の〈parabolique〉なコンテクストでは〈雑音的要素〉であった様々なレミニセンス場面を起点にした余剰部分を源泉として織りなされた事を考える時，初めて合点のいくものとなる。*C. S. B. R* では，あくまで抑制せねばならぬ迷走は，〈小説〉では，物語を生産していく原動力になる。

(V) で示したように，dormeur éveillé の回想場面の〈書き直し〉は，Combray の情景や Mme de St-Loup との散歩といった，〈小説〉の中で発展されるべきテーマやエピソードをすでに産み出していた。また *C.S.B.R* のシークエンス (2) に置かれていた朝焼けの空の映像による Jula の旅行

の記憶の再生 (Rèsurrection du ciel rouge) の場面は，Balbec への旅行の途上での laitière との出会いのエピソードを産み出している。Venise への母との旅行の回想が後に小説の一章を形成すべく拡大・発展させられるのは言うまでもない。さらに，バルコン上の日の光によって換起された観念連合の記述は，〈書き直し〉を経て，Gilberte への愛の幾つかの場面を予告するテクストへと拡張していたのだ[21]。

しかし，〈理論〉に関して非関与的だった要素が自由に再使用される事によって成立する物語セクションをその中心部とする小説が，なお，理念的書物としても存在し得る根拠は，先程示したように，その書物の語りの構造の支柱として，身体的記憶現象が機能している事にある。*C. S. B. R* では，énoncé のレベルで中心化を企てた〈理念〉は，〈小説〉では énonciation のレベルで〈小説〉の言説の生産を引き起こす。身体的記憶が，物語セクションを〈小説〉へと導入し，分節化する事によって，小説の理論的メッセージは小説の構造へと血肉化されたのである。

*　　*　　*

(III)~(IV) に於いて，我々は Proust の執筆活動が常にその芸術理論との関係の中で，終始規定されている事を確認した。Proust は，これらの分析においては，きわめて dogmatique な作家として把握される。しかし，(V) の *C. S. B. R* の執筆の〈現場〉には，このような単純なイメージでは説明し難いエクリチュールの運動がある。そして，この相反する二つの志向性の共存を可能ならしめる〈システム〉の上に〈小説〉が建造される事になる。この〈システム〉は，理念的構造によって，その構造とは非関与的な要素を流通させる。1908 年秋から翌年の春までの執筆過程が持つ意義は，理念的構造の発見であるよりも，むしろこの奇妙な〈システム〉の確立であったと言えよう。

註

1) Yoshikawa, Kazuo, "Comment a-t-il commencé à écrire *A la recherche du temps perdu*" *Société japonaise de Langue et Littérature*, n° 22, pp. 135-152.

Correspondance de Marcel Proust, publiée par Philip Kolb, Paris, Plon, tome VII, *Avant-Propos*. (この書簡集は以下 *Cor* で示す。)

2) Quémar, Clandine, "Autour de trois avant-textes de l'Ouverture de *la Recherche*", *Bulletin d'Informations proustiennes* (以下 B.I.P.), Presses de l'Ecole Normale Supérieure, n° 3, pp. 7-39.
Brun, Bernard, " L'Edition d'un brouillon et son interprétation : le problème du Contre Sainte Beure ", in *Lire les manuscrits : essai de critique génétique*, Paris, Flammarion, 1979, pp. 151-192.

3) *Carnet 1* は Philip Kolb によって出版されている。Proust, Marcel, *Le Carnet de 1908*, présenté par Philip Kolb, Gallimard, 1977 (*Cahier Marcel Proust 8*)。

4) *Proust 45* は, 4 種類の相異なる feuilles volantes が Bibliothèque nationale によって一巻にまとめられたもの。詳しくは, Brun, Bernard, arc. cit., pp. 165-167 を参照の事。

5) *Cahiers Sainte-Beure* の内容については, *L'inventaire de contenn des Cahiers Sainte-Beure*, B.I.P., n° 9, pp. 7-77 を参照。

6) Blanchot, Maurice, " L'expérience de Proust " in *Le livre à venir*, pp. 20-40.

7) このような意図を忠実に再現する事を編集方針に編まれたのが, Proust, Marcel, *Contre Sainte-Beuve*, texte établi par Pierre Clarac avec la collaboration d'Yves Sandre, Gallimard, 1971 (Bibliothèque de la Pléiade).

8) *Cor.*, tome VIII, pp. 320-321. また p. 320, Jeorge Lauris 宛書簡も参照の事。

9) Kawanago, Hiroshi, " Note sur l'état primitif du *Contre Sainte-Beuve* ", B.I.P., n° 13, 1982, pp. 7-16.

10) Ibid., pp. 7-9.

11) Sukiman, Susan Rublin, *Le roman à thèse*, Presses Universitaires de France, 1983, pp. 35-78.

12) *Cor.*, tome IX, pp. 155-156. また, この時期の Proust の出版社探しの活動を示す書簡として, Ibid., pp. 145-146, pp. 150-152 を参照の事。

13) この〈理論〉の分散と集中については以下を参照の事。Brun, Bernard. " « Une des lois vraiment immuables de ma vie spirituelle » : quelques éléments de la *démonstration* proustienne dans des brouillons de *Swann* ", B.I.P., n° 10, 1979, pp. 23-38. Roloff, Volker, " *François le Champi* et le texte retrouvé ", *Etudes proustiennes*, n° 3, 1979, pp. 259-287.

14) 言うまでもなくこの草稿は *Le temps retrouvé* の第一稿となる。〈apprentissage〉のテーマは, すでに *Cahiers Sainte-Beuve* の草稿にも点在しているが, このテーマが, 小説の構造に反映されるようになるのは, この時が最初であ

る。*Cahier 57, 58* は，Proust, Marcel, *Matinée chez la Princesse de Guermantes*, texte établi par Henri Bonnet en collaboration avec Bernard Brun, Gallimard, 1982. の中にその transcription がある。また，これらの執筆年代は，1910年末から1911年と考えられる。(Ibid., *Introduction*, pp. 15-30.) Susan Suleiman, op. cit., pp. 79-123 で histoire d'apprentissage は，〈roman à thèse〉の典型として分析されており，そのモデルは，〈真理の無知〉—〈試練〉—〈真理の認識〉—〈真理に基づく行動ないしその暗示〉というシークエンスによって成立している。Proust 自身，*Du côté de chez Swann* 出版直後，次のような手紙を Jacques Rivière 宛に出している。

Enfin je trouve un lecteur qui devine que mon livre est un ouvrage dogmatique et une construction! (. . .) Je déteste tellement les ouvrages idéologiques où le récit n'est qu'une faillite des intentions de l'auteur que j'ai préféré ne rien dire. Ce n'est qu' à la fin du livre, et une fois les leçons de ma vie comprises, que ma pensée se dévoilera. Celle que j'exprime à la fin du 1er volume, dans cette parenthèse sur le Bois de Boulogne que j'ai dressé là un simple paravent pour finir et clôturer un livre qui ne pouvait pas pour des raisons matérielles excéder 500 pages, est le contraire de ma conclusion. Elle est une étage, d'apparence subjective et dilettante, vers la plus objective et croyante des conclusions. (. . .)

Non, si je n'avais pas de croyances intellectuelles, si je cherchais simplement à me souvenir et à faire double emploi par ces souvenirs avec les jours vécus je ne prendrais pas, malade comme je suis, la peine d'écrire. Mais cette évolution d'une pensée, je n'ai pas voulu l'analyser abstraitement mais la recréer, la faire vivre. Je suis donc forcé de peidre des erreurs, sans croire devoire dire que je les tiens pour des erreurs; (. . .),

(Proust, Marcel. Rivière, Jacques, *Correspondance* 1914-1922, présenté et annoté par Philip Kolb, Gallimard, 1976, pp. 27-28)

15) *Cor.*, tome IX, pp. 61-62.

16) これらの場面の草稿の transcription は，以下のものがある。

1. Brun, Bernard, "Le dormeur éveillé, genése d'un roman", in *Etudes proustiennes*, Gallimard, 1982, pp. 241-286.
2. Yoshida, Jo, *Proust contre Ruskin: étude sur la genèse de deux voyages dans la Recherche d'après des Cahiers inédits*, thèse de 3e cycle dactylographiée, tome II, pp. 2-11.
3. Ibid., tome II, pp. 103-124.
4. Proust, Marcel, *Contre Sainte-Beuve*, préface de Bernard de Fallois. Gallimard-Idées, 1954, pp. 123-134.

17) Jean Milly による transcription, Milly, Jean. " Etudes génétiques de la rêverie des chambres dans l' « Ouverture » de la *Recherche*, B.I.P., n° 10, pp. 10-11.

18) Brun, Bernard (arc. cit., 1982) の transcription.

19) Ibid.

20) Ibid., pp. 308-316, Quémar, arc. cit., 及び吉川一義, " プルーストを読む——長いあいだ, 私は早くから寝た——", *Cahiers des études françaises*, n° 10, 1981, pp. 44-61 をこの章を書くにあたって全面的に参照した。

21) 註 10) で紹介した transcription を参照の事。